

創り出す喜び・まきばライフ ～未来へ Challenge～



須藤 裕紀（すどう・ひろのり）

須藤 陽子（すどう・ようこ）

千葉県館山市

《認定農業者》《家族経営協定》

推薦理由

須藤氏は、夫人と結婚後、生産コストの低減化に努めながら、規模の拡大に取り組むとともに併せて、平成6年から酪農体験の受け入れを進めてきた。

現在では、県内でも有数の飼養頭数155頭、うち経産牛90頭、飼料作物作付面積1360a、放牧地面積130aの経営規模を夫婦と父と雇用1人の4人で賄い、年間約840トンの生乳の販売と併せて、昨年一年間で84回、約2000人の酪農体験者を受け入れている。

この経営の特筆すべき点は、夫婦2人で相互に助け合いながら業務を分担し、優れた酪農経営を実践しながら、その基盤を活用した酪農体験希望者の受け入れを経営部門としてとり入れ、その実践により経営の改善だけでなく、消費者への酪農イメージアップ等社会的な貢献にも力を注いでいる。

経営内容については、酪農部門は裕紀氏の担当として、廃材や中古機械の活用による低コストで省力化を目指した投資を抑えた効率的な生産でありながら、個体管理の徹底により、乳質も優れた生産性の高い経営となっている。

酪農体験部門は陽子夫人が分担し、おおむね週2回、希望者を受け入れている。

その内容は、夫人の資質によるところが大きいですが、搾乳やアイスクリームなどの調理体験を通して、単なる酪農体験ではなく、酪農のすばらしさを知らしめ、食の大切さや命の大切さも織り交ぜた内容となっている。希望者は学校関係者を中心に年々増加し、本年度は現在のところ昨年を大きく上回る状況である。

夫人は、酪農に対する消費者への理解や、食育等に関する活動を地域内だけでなく、県域あるいは全国的組織の中心となって行動をしている。裕紀氏がそうした活動を陰で

支えながら、生産性の高い酪農を追及していることは、まさに男女共同参画を実践している経営である。

また、酪農の現場を踏まえて自費出版した絵本は、地元のボランティアグループの活動を通して広く紹介されるなど、酪農の情報を発信することで、多くの人々へ影響を与えている。

農家が実施している体験型農業としてはその質、量とも極めて優れた実績を残していること、それを支えているのが、県内でも規模の大きい経営でありながら、生産性、乳質、収益性にも優れた酪農経営である。

夫婦二人でそれぞれ酪農経営部門と酪農体験部門を分担し、互いに協力しながら、収益性の高い経営を実践し、なおかつ、酪農現場の情報発信や食育等社会的にも大きく貢献している経営である。

こうした点を高く評価して優良事例として推薦する。

(千葉県優良事例選定審査委員会委員長 香川 莊一)

発表事例の内容

1 地域の概況

館山市は、千葉県房総半島の南に位置し、西は波の静かな鏡ヶ浦、南は太平洋に面し、北と東は標高 70m 程度の山に囲まれた地域である。

気候は平均気温が 15~16℃と冬でも暖かく、この温暖な気候を生かし、水稻、園芸、畜産を組み合わせた複合経営が営われている。中でも園芸部門(花き、野菜、果実)での割合は、全体の約 48%を占め、農業の中心となっている。

平成 18 年の農業算出額は 64 億 4000 万円であり、品目別にみると、畜産、花き、野菜、米の順となっている。

近年では、アクアラインや館山自動車道の開通により首都圏から一年を通した観光客も訪れ、いちご狩りや花つみなど、観光に結びつけた農業も展開されている。

畜産においては、隣接の南房総市に「酪農発祥の地」があるように当地域の酪農における歴史も古く、どこの家にも乳牛が飼われていた時代もあった。

しかし近年では、排せつ物にかかる環境問題や担い手の減少、飼料価格の高騰もあり戸数の減少が進み、現在は酪農家 41 戸、肉牛農家 8 戸、養豚農家 4 戸、養鶏場 5 戸となっている。



2 経営・生産の内容

1) 労働力の構成（平成 21 年 6 月現在）

区分	経営主との 続柄	年齢	農業従事日数（日）		部門または作業担当	備考
				うち畜産部門		
家族	本人	44	320	320	酪農全般	
	妻	45	320	320	酪農全般・体験部門	
	父	74	100	50	育成部門・水稻	
常雇	研修生	27	250	250	酪農全般	
臨時雇	延べ人日			106 人		

2) 収入等の状況（平成 20 年 1 月～12 月）

（単位：円）

部門	種類・品目	販売・出荷量	販売額・収入額	備考
酪農	牛乳	839,069	82,963,785	
	個体販売	37	626,050	
	その他			
合計			83,589,835	

3) 土地所有と利用状況

区分		実面積 (ha)		飼料生産利用のべ面積 (ha)	
			うち借地面積		うち借地面積
耕地	水田				
	転作田				
	飼料畑	6.0	5.7		
	未利用地				
	計	6.0	5.7		
草地	個別利用地	2.9	1.6		
	共同利用地				
	計	2.9	1.6		
	野草地				
	山林原野				

4) 自給飼料の生産と利用状況（平成 20 年 1 月～12 月）

使用 区分	飼料の 作付体系	面積 (a)		所有 区分	総収量 (t)	主な利用形態等 (採草の場合)
		実面積	のべ面積			
採草	ミレット	160	160	借地	48	サイレージ
兼用	トウモロコシ +ソルゴ	600	1,200	自己+ 借地	450	サイレージ
放牧	混播牧草	8.9	130	自己		

5) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績（平成 20 年 1 月～12 月）

経営の概要	労働力員数 (畜産部門・2000時間換算)		家族	2.3 人
			雇用	1.2 人
	経産牛平均飼養頭数			89.5 頭
	飼料生産用地延べ面積			1,360 a
	年間総産乳量			839,069 kg
	年間総販売乳量			839,069 kg
	年間子牛販売頭数			37 頭
	年間育成牛等販売頭数			頭
収益性	酪農部門年間総所得			10,394,097 円
	経産牛1頭当たり年間所得			116,135 円
	所得率			12.4 %
	経産牛1頭当たり	部門収入		933,965 円
		うち牛乳販売収入		926,970 円
		売上原価		759,128 円
		うち購入飼料費		488,907 円
うち労働費		76,066 円		
		うち減価償却費	97,897 円	
生産性	牛乳生産	経産牛1頭当たり年間産乳量		9,375 kg
		平均分娩間隔		13.0 カ月
		受胎に要した種付回数		2.1 回
		牛乳1kg当たり平均価格		98.9 円
		乳脂率		4.00 %
		無脂乳固形分率		8.72 %
		体細胞数		14.9 万個/ml
		細菌数		1.0 万個/ml
	粗飼料	経産牛1頭当たり飼料生産のべ面積		a
		借入地依存率		82.0 %
	乳飼比(育成・その他含む)			52.7 %
	生乳100kg当たり差引生産原価			8,023 円
	経産牛1頭当たり投下労働時間			78 時間
安全性	経産牛1頭当たり長期借入金残高(期末時)			83,799 円
	経産牛1頭当たり年間借入金償還負担額			27,932 円

(2) 技術等の概要

地帯区分	平地農業地域	
飼養品種	ホルスタイン、ジャージー	
後継者の確保状況		
飼養 ・搾乳	飼養方式	フリーストール
	搾乳方式	アブレストパーラー
	牛群検定事業	無
飼料	自家配合の実施	有
	TMRの実施	有
	通年サイレージ給与の実施	有
	食品副産物の利用	有(トウモロコシ、米ぬか)
繁殖 ・育成	ETの活用生産の実施	無
	F ₁ 生産の実施	有(初任牛のみ)
	カーフハッチの飼養	無
	採食を伴う放牧の実施	有
	経産牛の自家産割合	100%
販売	加工・販売部門の有無	無
	地産地消の取り組み	
その他	肥育部門の実施	
	協業・共同作業の実施	無
	施設・機器等共同利用	無
	共同堆肥センターの利用	無
	ヘルパーの活用	有
	コントラクターの活用	無
	公共育成牧場の利用	
生産部門以外の取り組み		

6) 主な施設・機械の保有状況

種類	名称
畜舎・施設	牛舎(2)、牛舎(フリーストール)、たい肥舎(2)、育成牛舎(フリーストール)、倉庫、体験工房
機械・器具	運搬車、トラクター(3)、フォークリフト、軽トラック、コンバイン、ホイールローダー、パーラー、ダンプ、ユンボ、サブソイラー、テッター、ロータリーモア、コーンハーバスター、リバーシブルプラウ

7) 家畜排せつ物の処理・利用状況

(1) 処理の内容

処理方式	混合処理
処理方法	ホイールローダーとダンプ利用により畜舎から乾燥ハウスに移動し水分調整後発酵処理施設にてたい肥化している。
敷料	

(2) 利用の内容

内容	割合 (%)	用途・利用先等	条件等	備考
販売				
交換	10	近隣農家	稲わらとの交換	
無償譲渡				
自家利用	90	飼料畑への還元		

3 経営の歩み

1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和初期	酪農・米・みかん	3頭	4 ha	祖父が3頭の乳牛を導入
〃 49年	酪農主業となる	40頭		廃材利用による40頭牛舎建築 チールスマ系統の乳牛8頭導入
〃 56年				20頭育成牛舎建築（廃材利用）
〃 58年		60頭		裕紀 就農
〃 59年				裕紀 アメリカへ2年間の研修
〃 62年				結婚
平成2年				中国人研修生 受け入れ
〃 6年		90頭		幼稚園の体験受け入れの開始。廃材利用によるフリーストール牛舎完成。地元幼稚園の体験受入
〃 7年				北海道より乳牛14頭導入
〃 8年				裕紀 千葉県農業士に認定される
〃 9年				裕紀 館山市認定農業者になる 研修生の受け入れを開始 県酪連指定「ちかばの牛乳」の看板制作
〃 10年		100頭		北海道より乳牛7頭導入 日本の牧場スタンプラリーにエントリー
〃 11年				知的障害者の職業訓練受け入れの開始。中学生の職場体験受け入れ。日本の牧場スタンプラリーでベストコミュニケーション賞受賞。搾乳見学スペース設置（廃材利用）。牧場ホームページ開設
〃 12年				育成牛の放牧が始まる。陽子 千葉県農業士になる。いきいき子どもフェスティバル協力
〃 13年		130頭		育成牛舎（フリーストール）完成。酪農教育ファームに認定される。TV番組、雑誌に牧場紹介される
〃 15年				バンカーサイロ完成。千葉自然学校設立
〃 16年				父裕より裕紀へ経営委譲される。TV CM出演 年間体験受入回数 38回
〃 17年				コンブリートフィーダー“夢・ドリーム号”の導入。フリーストール牛舎を拡張する。 南房総みるく農協青年部・女性部ともに役員 中央酪農会議出版「ミルククラブ」に創作物語「モモコ」が連載される

〃 17年				雑誌に牧場紹介される。TV ドラマで牧場利用。 年間体験受入回数 47回
〃 18年			6 ha	コーンハーベスターをリース導入。陽子 家畜排せつ物の利用促進のための意見交換委員になる。陽子 千葉県農業士県理事副会長。体験工房「ミルクキッチン」完成。TV 番組、雑誌に牧場紹介される。絵本「牧場のおはなしモモコ」を自費出版。地域 SNS 房州わんだあらんどに登録をする。年間体験受入回数 64回
〃 19年				陽子 ちば畜産レディースネットワークが発足し、副会長となる。陽子 館山市認定農業者になる。絵本「牧場のおはなし2いのち」の自費出版と「モモコ」増刷。「モモコ読み聞かせ隊」が発足する。あわ夢まつりに「モモコ読み聞かせ隊」が参加する。TV、雑誌に牧場紹介される。酪農教育ファーム関係各地にて講師で参加（東京・東北）。年間体験受入回数 67回
〃 20年				あわ夢まつりに「モモコ続」で参加する。TV、雑誌に牧場紹介される。羊毛クラフト体験を始める。年間体験受入回数 84回
〃 21年				羊毛クラフト体験ハウス「わたあめ」完成 7月までの体験受入回数 45回

※体験受入回数は年度

2) 過去5年間の生産活動の推移

	平成 16 年	平成 17 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年
畜産部門労働力実員数 (人)	4	4	4	4	4
飼養頭羽数 (頭・羽)	117	123	139	149	155
販売・出荷量等 (t・kg・頭)	657	698	802	812	839
畜産部門の総売上高 (円)	67,063	71,675	79,832	79,361	83,589
主産物の売上高 (円)	66,185	70,662	78,817	77,263	82,963

4 特色ある経営・生産活動の内容

1) 牧場作りにおける一貫した廃材・中古機械の利用

先代から、畜舎の材料や牧柵など使えるものは大切に再利用しながら牧場作りを行ってきた。新規投資をするときも既存の施設を最大限に活かし、低コストで、次へつながる作業性を考慮して設計した。

建設においても業者にすべてを任せるのではなく、一緒に建築にかかわり、コンクリート打ちなど自分たちでできることは、すべて自分で作ってきた。

当時借り入れた畜舎建設の制度資金もあと2年で償還が終了する。

また、機械修理もできるだけ自分で行き、一貫した廃材中古利用と自己努力でコスト低減に努めてきた。

[施設・機械の一覧]

昭和 48 年建築の 40 頭牛舎は廃材使用・昭和 54 年の育成牛舎も廃材利用・平成 6 年建築のフリーストール牛舎の柱は古電柱・パーラー施設、牛乳処理室は育成小屋の改築・平成 13 年建築のフリーストール育成牛舎の合掌およびバンカーサイロの施設合掌は経営主の元母校の合掌を使用・牧柵は枕木や古電柱・体験工房は旧牛舎・体験ハウスは元育成牛舎の屋根裏（わら小屋）の改造・深型発酵牛ふん施設は中古・除草剤散布機は自家製

中古機械として、トラクター 3 台・ヘイベラー・フォーレージハーベスター・コンボ・フォークリフト 1 台・ダンプ 3 台・ホイールローダー 1 台

2) 牛のストレス低減と作業効率を重視した牛舎

昭和 48 年建築の 40 頭つなぎ牛舎の老朽化のため、平成 4 年末にフリーストール牛舎の建設を開始した。畜舎設計は、夏涼しく冬暖かい地域性を活かし、北東からの風を多く取り入れるため棟高を 4.5m とり、壁は作らなかつた。夏の暑熱対策も考慮し大型扇風機は 10 台導入した。

ベッドサイズは、縦 2.3m、幅 1.2m とし、ネックレールまでの長さを 1.7m、高さを 1.1m とし牛の行動学を考慮して立ち上がる動作に無理のないサイズにした。

敷料は山砂を使用し、乳房炎、細菌の増殖を防いでいる。

通路幅は 4.3m と 3.7m と可能な範囲で広く取り、ふん尿の乾きを良くし、蹄球腐乱の予防にもつなげている。牛 1 頭あたりの床面積はおよそ 10.7 m²となっている。

パーラーは、アブレスト式ウォークスルータイプで、牛の移動面をフラットにしてある。

牛のけい留を個々の搾乳時のみで解放できるようにして牛のストレス軽減を図っている。搾乳に要する時間は 80 頭で 2 時間（2 名）。

作業の役割分担は、4 人の労力を搾乳に 2 名、飼料給与とベッドメイクに 1 人、子牛管理に 1 人を配置している。同じ時間内で分業しているため短時間で作業を終了することができる。

育成牛の給餌方法も 2 群に分けられた牛に一度で与える工夫をしており、作業に無駄をなくし、牧場全体の飼料管理・搾乳・ふん尿処理も含めて朝 3 時間半・夕方 3 時間半の作業時間となっている。

3) 自給飼料生産と低利用・未利用資源の活用

自給飼料生産は、トウモロコシとソルガムの混播で 6 ha 作付している。

気候温暖な房州（千葉県南部）では、4 月上旬に播種が可能であり、十分な気温と日照時間が確保できるため、7 月下旬から 8 月上旬にトウモロコシと 1 番のソルガム、12 月に 2 番のソルガムを収穫している。

貯蔵はバンカーサイロを用い、刈り取り終了後ダンプで直接搬入し鎮圧はショベルローダーを利用し、通年でサイレージ給与できるように生産量を確保している。

サイレージは、定期的に千葉県畜産総合研究センターや民間種苗メーカーに依頼して、成分把握を行っている。

また、飼料費の低減のため、高蛋白・高エネルギー飼料として豆腐粕を市内の豆腐店から父の代から30年以上、毎日引き取って利用している。

さらに、9月の稲刈り時期になると近隣の水田農家からの稲わらを収集し育成牛の粗飼料としている。毎年10ha程度集めている。

これらの取り組みにより、平成20年の乳飼費は52.7%に抑えることができた。

4) 飼料給与体系について

飼料給与は1日2回を搾乳中に行っている。給与方法はTMRで電動式のコンプリートフィーダーが給与スペースを静かに移動するようになっている。

操作は飼料の排出具合を見ながら手動で行う方法であるため、女性や初めての酪農ヘルパーでも簡単に対応できる。

搾乳後の牛は、常に出来上がったばかりのTMRを食べることができる。

5) 育成牛の放牧によるコスト低減と健康管理の充実

後継牛はすべて自家育成で、生後約6ヵ月から群飼いを開始しフリーストール牛舎に慣れさせている。群分けは12ヵ月までと12ヵ月以上で種付けまでの2群に分けている。

種付け後は妊娠確認から分娩までの牛群は別管理となりそれぞれが放牧されている。

育成牛の放牧によりふん尿処理の労力軽減や飼料代のコスト低減、さらに肢蹄の強い健康で食い込みの良い牛作りにつながっている。

6) 牛の状態を確実に知る

牛の個体が簡単に識別できるように、年代ごとに耳標の色分けを行い、発情を正確に確認している。また、牛乳処理室に大きな繁殖予定表を設置し、全頭の状態が一目で分かるように色分けされた事項のシールが貼られ、個体の分娩日・発情日・種付け日・出産予定日・出産日を誰でも分かるようにしている。

個体別乳量は、ミルクアイ（簡易乳量計）により搾乳時に毎回測定し、個体能力を把握し、月3回の乳質検査と年4回のバルク乳細菌検査を実施し、品質面についてのチェックを行っている。

また、月に一度の共済組合獣医師によるハードヘルスを行うことで、妊娠鑑定や繁殖状況を正確に把握し早期発見・早期治療に取り組んでいる。

7) 自家ほ場還元を主体としたふん尿利用

ふん尿処理は、ふん尿混合のためホイルローダーとダンプを使用し、牛舎からハウス乾燥施設へ搬入し発酵適期まで水分を低下させる。

その後深型の発酵装置に移動し、2段階で完熟たい肥の生産を行っている。

たい肥の9割は、飼料畑へ還元し循環させ、残りの1割を近隣畑作農家へ供給している。

今後、不需要期対応を含めたい肥舎の増築を検討している。

5 地域農業や地域社会との協調、貢献

1) 気軽に立ち寄れる牧場づくり

平成6年に道路沿いに建設したフリーストール牛舎をきっかけに、牛が車窓から良く見えたこととグリーンツーリズムへの社会的関心の高まりもあり、観光客や地域の親子連れが牧場へ立ち寄るようになった。

そのような背景と、この年に地域の幼稚園児を招いた乳搾りの体験を行ったことが後への発展の第一歩となった。

平成5年に千葉県酪連の「千葉県酪連指定消費者交流牧場」に登録し看板を設置し、搾乳見学スペースを設けた。

平成9年に全国の交流牧場のネットワーク「地域交流牧場全国連絡会」の発起人の一人として活動が始まり、平成11年7月にこの会が発足に至った。

同じころ（平成10年）中央酪農会議主催の「日本の牧場スタンプラリー」にエントリーし、参加牧場中2牧場に与えられるベストコミュニケーション賞を受賞し、副賞で翌年イギリスの酪農教育ファームを見聞する機会に恵まれた。

海外の取り組みや全国各地の体験農業の情報を得ることで、本業の牛乳生産を大切にしながら、フリーストール牛舎を導入することで生まれたゆとりの時間を使って、牧場を開放し地域の方や都会の方々の要望に応える形で体験メニュー（ジャージー、サラブレッド、ポニー、ミニブタ、ヤギ・羊等の多様な動物をそろえて触れ合いの場や各種料理作り等）を整えてきた。

この取り組みを通して、酪農業の持つ特別な生命産業としての癒し機能^{いやし}などの存在に気づかされた。

2) クリスマス・イルミネーションとイベント開催

平成6年から毎年12月に牧場をイルミネーションで飾り、1日だけの地域の子どもたちを招いてのイベントを開催してきた。手作りのイルミネーションで「のモウよミルク」など牛乳消費拡大の文字や牧場ならではの牛や動物たちをかたどった電飾を手作りして飾ってきた。BSEが発生した年も農業者全体を応援する「がんばれ farmers」と飾るなどして続けてきている。昨年は、イベントに150名が参加した。

3) 職業訓練・職業体験の受け入れ

平成7年から、中学生の職業体験の受け入れや、福祉施設の職業訓練の受け入れを実施してきた。職業訓練では福祉施設の人が社会参加できるような成果があった。

4) 酪農教育ファーム認証と有料化

平成12年、訪れる方の要望に応えるうちに体験の受け入れ回数が増え、受け入れ側も希望する側も相互に責任を持つために有料化した。有料化にあたりプログラムの目的と方法を精査し酪農教育ファームの研修を受けて酪農教育ファームを開始した。

その結果、酪農体験とは、動物や自然との触れ合いから、「いのちや食の大切さ」を学べること、さらに「職業についての努力や工夫の大切さ」、「生き抜くことの意味」など、実にさまざまな視点から問いかけることのできる活動であることが分かった。

当時のメニューは「乳搾り」と「バター作り」「アイス作り」だったが、地道にきめ細やかに続けてきた結果、平成17年には年間47回を数えた。そのため翌年、旧牛舎を体験工房に改築するとともに、「アイスサンデー作り」「ピザ作り」「ヨーグルトケーキ作り」「牛乳料理講習」などメニューの充実化を図った。

有料化することで、責任と目的を持った体験の提供ができた。

酪農教育ファーム利用報告書のアンケート結果をみても、ほとんどが「大変満足」「いのちの大切さを改めて感じた」「乳牛に感謝の気持ちがもてた」「牛乳など乳製品を感謝して飲みたい」という回答を得ている。

日々牛と接する酪農家だからこそ、説得力のある命の話しや、努力して頑張り抜く話など、体験や話を通じて子どもたちに伝えることができる。

また、酪農業を理解してもらい牛乳消費の拡大にもつなげている。

その一方で、体験に参加してくれる人たちと触れ合うことで、励まされていることも感じるようになった。特に酪農業の危機といわれた昨年は、受け入れ回数84回約2000人の訪問者に勇気づけられた。

それらの詳細は今年の酪農業界情報誌であるデイリーマン誌に5ヵ月にわたり、交流牧場日誌として連載された。

5) バター作りのテーマソングの制作

バター作りの体験を楽しくするために、テーマソング「まきばで生まれたミルクの歌」を仲間たちとともに制作し、体験工房のBGMとして利用している。

軽快な音楽にのってびんを振って楽しく作るバター作り体験は、テレビ・ラジオ等で何度も紹介された。

6) 絵本 牧場のおはなし「モモコ」・牧場のおはなし2「いのち」の自費出版

平成18年12月、体験受け入れの活動中の出来事や、日々の生活の中から感じたことを陽子夫人が絵本にして出版した。牧場のおはなし「モモコ」は子育ての大切さと母娘の絆きずなを描いた大人の女性のための絵本だが、当初刊行した1000冊は半年を待たずに完売、次の年の4月に出版した2冊目の「いのち」の刊行時に1000冊を増刷し、現在は通算1600冊が手元を離れている。「いのち」は文字通り命の大切さを訴えた児童向けの絵本で、体験の受け入れ中にあった事実を基に描いている。こちらは3000冊を作成した。

これをきっかけに地元で、自発的に年齢や性別、職業もさまざまな人たちが集まり「モモコ読み聞かせ隊」が発足している。

幼稚園・老人ホーム・ホテルや子供向けイベント「あわ夢まつり」にも3年前から参加し、昨年は横浜開港150周年のプレイベントとして、横浜赤レンガ倉庫でのイベント

にも出張参加している。

読み聞かせは、パソコンを利用してイラストをプロジェクターで映し出し、ナレーションとセリフの配役を決め、かぶり物を身に付けての公演を行っている。

メンバーは現在 34 名まで増えボランティアで活動しており、これらの活動からは本当にたくさんの励ましを得ている。

7) 体験メニューの拡大と体験ハウスの設置

平成 20 年、牧場にいる羊の毛を使ったクラフト作りの研究が、地域の人々とともに始まった。半年研究し、成果が実り体験メニューに加えられるまでになった。

専用スペースとして、わら小屋を改築して体験ハウス「わたちゃんのいえ」を造った。

たくさんの人と触れ合うことで、思いもかけない発想が生まれ、実現することでまた新たなつながりに発展している。

8) 夫婦で役割を明確にした生産活動と地域活動

この経営は、経営主がアメリカ研修以降、25 年間にわたり規模拡大と経営改善を着実に積み重ねることで現在の酪農経営を実現させた。さらに、この経営をベースに夫人が「酪農体験」を全国的にさがして取り入れ、消費者をも視野に入れた、情報を発信できる新たな形態に発展させている。

この「酪農体験」は、牧場に一般消費者が入ることに家族みんなが慣れてきたこと、夫人の発想（牧場が持っている付加価値）と訪れる人々の提案や意見を取り入れる柔軟な対応が、地域への広がりとなっている。

平成 18 年に家族経営協定を締結し夫婦での役割分担を明確にして、お互い補完しながら生産活動と地域活動に積極的に参加してきている。

特に地域交流牧場全国連絡会の発足に当たり、中心的な役割（発起人、元理事）を果たしたほか、ちば畜産レディースネットワーク（発起人、副会長）の発足以降、畜産経営での女性の地位向上に向けて運動の展開や千葉県農業士（前副会長：夫人）や、千葉県農山漁村いきいきアドバイザー（男女共同参画推進委員：知事認証）として後輩の指導等幅広く活動している。

（夫婦の主な地域活動は【酪農】経営の実績・技術等の概要Ⅳを参照）

6 今後の目指す方向性と課題

酪農業の危機といわれた過去 2 年間に、乳牛たちの健康を守り、質の良い牛乳を生産し続けるために、今までになく切り詰めた経営をしてきた。そんな中で体験に訪れる子どもたちや地域の人々に励ましや勇気をもらい、頑張り抜いてきた。

今後、現状の経営規模を維持し、周辺にある遊休農地を活用した自給飼料生産基盤の拡大と稲ワラと堆肥の交換など地元耕種農家との連携を一層強化することにより、経営安定を進めていき、将来の経営移譲に継げていきたい。

希望者が増加している体験部門については、今後経営部門とのバランスを十分配慮する

とともに、地域の仲間達と共にこの運動の拡大に取り組んでいきたい。

第一次産業は、国民の健康を守る最も大切な産業である。その産業を守る社会の一員であり続けることに努めていきたい。

これからは、将来を担う子どもたちに、「自然や動物との共存」「いのちと食の大切さ」や「生き抜くという意味」など酪農家としてできる限りのことを伝えていきたい。

そして、いつまでも地域の人々と共存していける酪農家であるためにも、安全で質の高い牛乳生産に向けて一層の努力をしていく考えである。

【写真】



古電柱を柱に使ったフリーストール牛舎



バンカーサイロ ローターで鎮圧



放牧の様子
(社)日本草地畜産種子協会指定の展示牧場



Xmas 牧場全体をイルミネーションで装飾
牧場ならではのイベントを開催 150人が参加



乳搾り体験中



モモコ読み聞かせ隊 : あわ夢まつりにて公園



「モモコ」は子育ての大切さと母娘の絆を描いた
大人の女性のための絵本
「いのち」は命の大切さを訴えた児童向けの絵本



ちば畜産レディーズネットワーク
畜産協会主催の地域イベントへ参加
県域では唯一の畜産女性組織